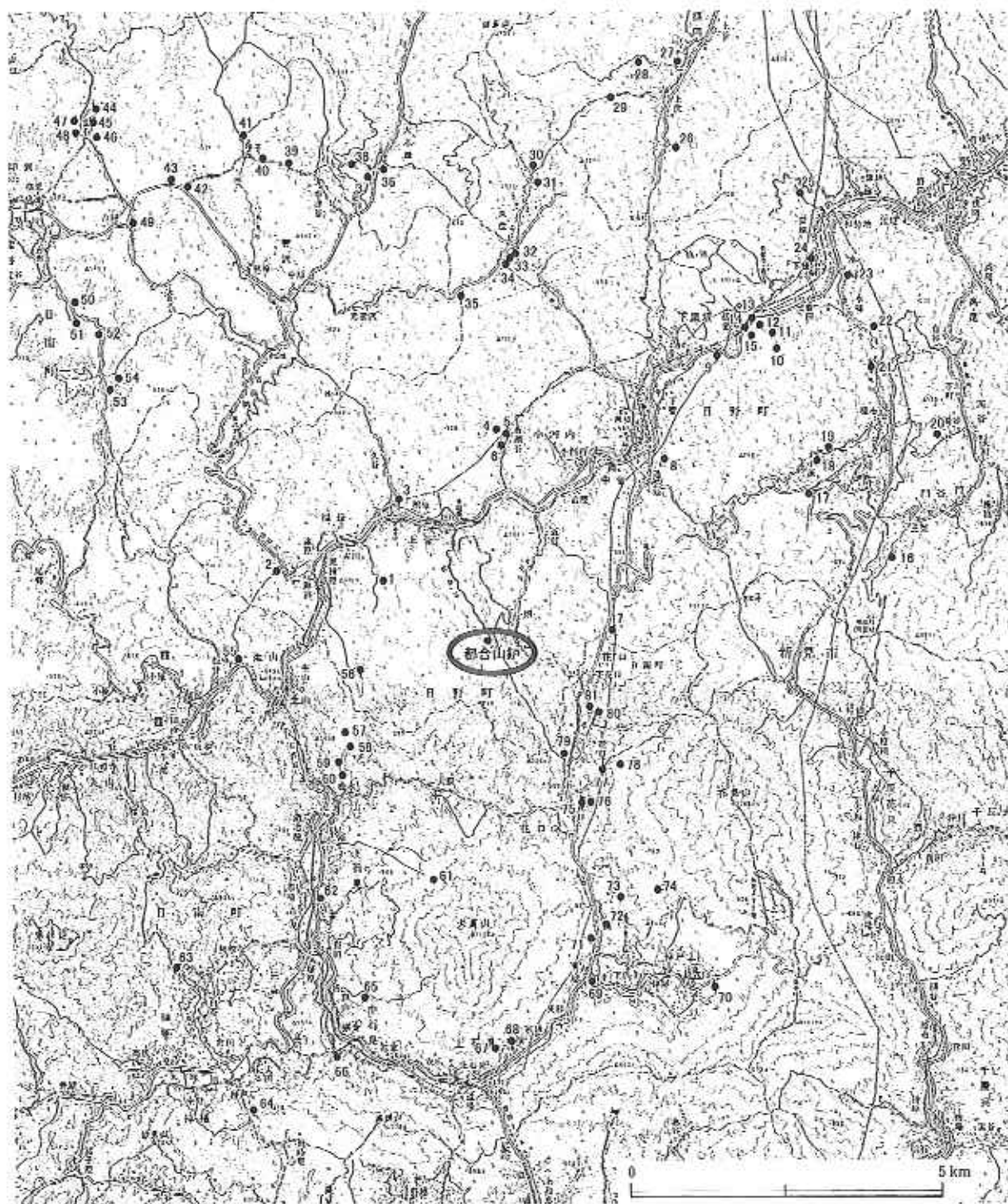


資料1(都合山たたら遺跡について)

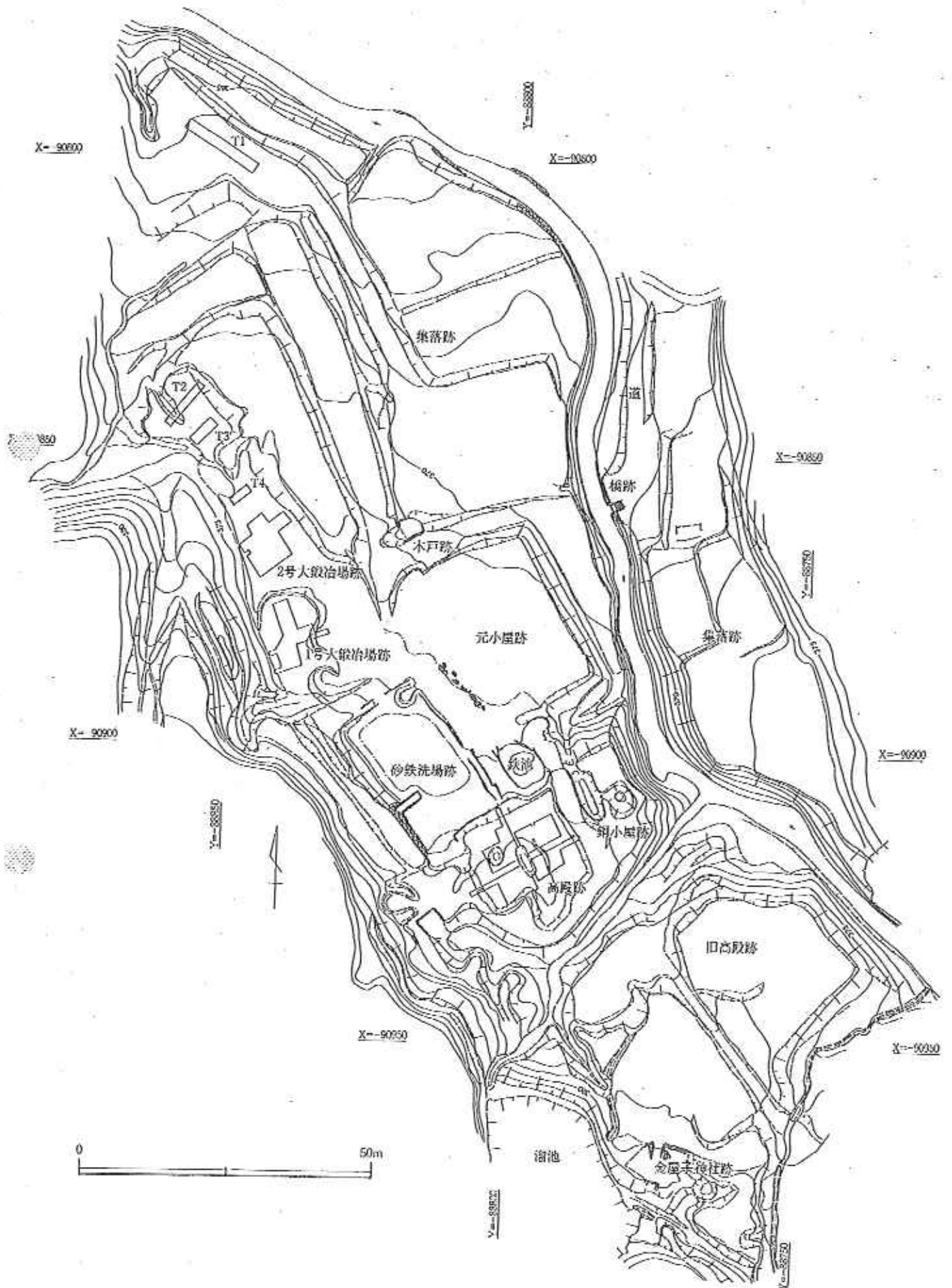


(国土地理院5万分の1地形図「根雨」「石見」を縮小)

第1図 都合山鉾と周辺の製鉄関連遺跡

1人向山、2菅福山、3才木谷、4新田原、5布施谷、6榎ノ木谷、7鉾原、8黒谷、9才ノ原、10ハタの原、11上ミ原、12小井手、13鍛冶屋原坂口、14鍛冶屋原中成、15鍛冶屋原ノ上ミ、16大鉄穴、17塩滝、18滝谷、19高下原、20鉾原、21長島、22古屋敷、23小川尻、24宮ノ下モ、25姫谷、26峠根、27福岡山、28家ノ上、29立木谷、30二部谷、31鑛村、32タタラ原、33タタラ床、34大沢鉾床、35ノゴロ尻、36大木屋、37トウコウ城、38鍛冶床、39土居、40金糞場、41呼子山、42西呼子、43吉ヶ谷、44楨ヶ原、45桃ノ木谷尻、46ウロの下、47古屋敷、48向谷、49吉鉾、50カヤザコ、51通ノ子遺下、52通子山第1、53通子山第2、54通子山第3、55板井谷、56持ヶ滝山、57一の倉尻、58安田ガマ尻、59小鷲山尻、60押谷山、61大倉山、62植松、63白谷、64小林尻、65銀山間歩、66鑛原、67山根鉄山所、68山根鉾原、69福成山、70鉄穴内たたら原、71砂田山、72洞金糞坂、73ヒノ峠、74平栗別、75石塔西、76石塔東、77谷奥、78金屋ヶ谷、79都合谷、80長者原山、81鉾原

「都合山鉾の研究」(鳥取県文化財保存協会、2010年)より



都合山たたら跡見取り図

■都合山たたら沿革

都合山たたらは、近藤家5代当主、喜八郎が1889(明治22)年から1899(明治32)年にかけて経営したたたらである。

操業開始翌年の1890(明治23)年から、高殿1軒、大鍛冶場2軒による生産体制が整い、年平均55.3代による鉄生産が行われていた。そのほとんどは鋸(けら)押しによるもので、銚(ずく)押しは約6%に過ぎない。

当時の「鳥取県統計書」によれば、都合山製鉄所として記載され、職工人員は、1890年が製鉄7人・割鉄25人、翌年は製鉄7人・割鉄20人と、たたらより大鍛冶場の人員を多く抱えていたことがうかがわれる。

記録では、1899年12月には廃業し、操業の主体は、同じく近藤家が経営していた、菅福山たたら(日野町福長・諏訪地内)に移っていったものとみられる。

また、都合山たたらは、1898(明治31)年、東京帝国大学の依田一(たわら・くにいち)教授により詳細な調査が行われていることで知られ、高殿をはじめ、大鍛冶場や地下構造などの図面および記録が残されている。

2008(平成20)年、依田教授の調査の検証と、都合山たたらの実態を総合的に解明するため、都合山鉦跡研究会による発掘調査が行われた。

結果、山内の構造や生産体制など、近藤家が江戸時代後期から行ってきた鉄山経営の特色をよく示すたたらであったことが判明した。

その後、伯耆国たたら顕彰会の発足や、たたら楽校の開校、小説「TATARA」出版、たたらフォーラムやふいご祭などのイベント開催など、日野町だけでなく、奥日野地域あげてのたたら文化の顕彰活動が盛んとなり、「たたら里奥日野」が、新しいまちのキャッチフレーズとして定着しつつある。

日野町では、都合山たたら遺跡をき損や開発行為から守り、永く保存していくため、昨年、遺跡の大部分の土地を買い上げ、町有地化した。学術的にも貴重な文化財である遺跡の適正な保存と、地域遺産としての観光面から見た活用方法などについて検討する必要がある。

(参考:「都合山鉦跡の研究」)

都合山たたら遺跡発掘調査（2008年）



発掘後の高殿跡



調査説明会の様子



調査説明会の様子（本床）

現在の状況 (2014年)



たたら街道(上菅側)



ガードレールの橋が数カ所



たたら場入口



遺跡内

資料2 (近藤家住宅周辺の町並み)

98. 近藤登志夫家住宅

日野郡日野町根雨620

主屋 木造、二階建、切妻造、棧瓦葺

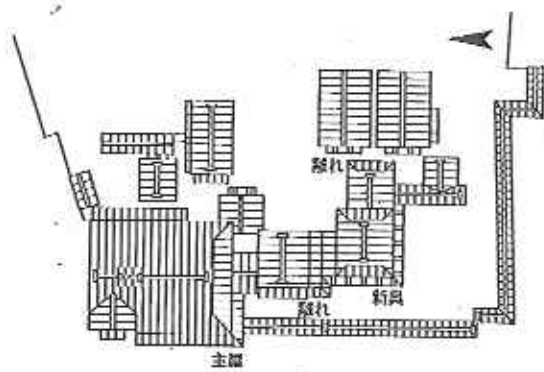
元治元年(普請後)
(1864年)

近藤家は根雨の宿場町に位置する旧家で、江戸中期に備後国から移住したと伝わる。「備後屋」の屋号で奥日野郡の大庄屋を務め、安永8年(1779)以降製鉄業を進めた。徐々に経営規模を拡大し、江戸末期には大阪に出店を置くまでになった。明治20年には近藤喜八郎が福岡山製鉄所を建設し、製鉄業を飛躍的に近代化させた(『鳥取県の地名』平凡社、1992年、『鳥取県の歴史』山川出版社、1997年)。

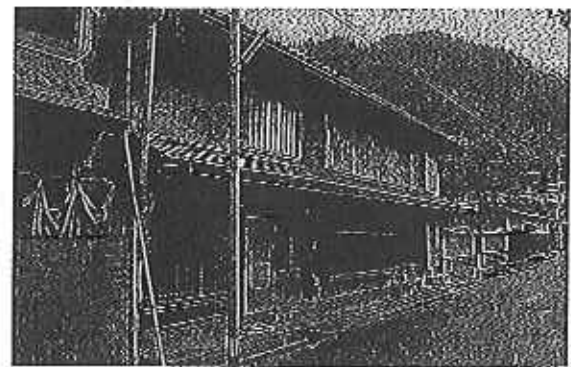
敷地は出雲街道に面し、北側にウチグラと平入の主屋が建つ。上手にブツマ・オクナンドのある離れと、主人の居間を中心とした離れがつながり、さらに上手に十二畳と十畳の座敷がある新奥が続く。裏側には土蔵が建つ。

主屋は表側が事務所に改造されているが、左手に土間を通し、右手に部屋を喰い違いで2列並べた町家に復原できる。ウチグラの元治元年(1864)の棟札と、普請帳から、主屋の建築年代も同時期と思われる。正面は漆喰で塗りこめ、格子と虫籠窓をつける。一階の庇桁をうける持送には、打出の小槌・宝珠・渦巻の図柄が彫られている。

二階は、床の間を備えた座敷が表側と裏側に造られる。表側の部屋は奥行の浅い床の間と天袋を設け、長押を入れる。裏側の部屋も床の間と付書院を備え、長押を入れる。裏側の部屋境の欄間や付書院の欄間には変り組障子を入れ、床柱は磨き丸太とする。床脇は畳敷で窓を開く。明治初期の民家の座敷



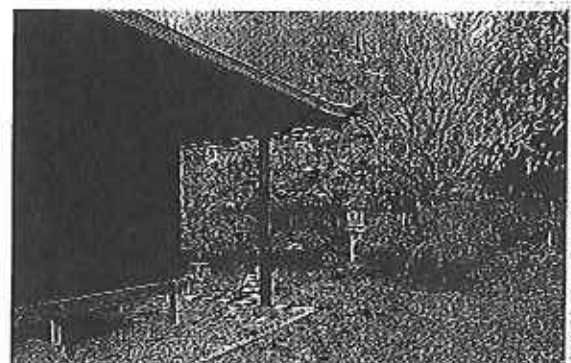
▲配置図



▲主屋外観



▲敷地外観



▲庭

に通じる意匠をもつ。二階は建設後階段位置が変更されており、同時に改造された可能性もある。

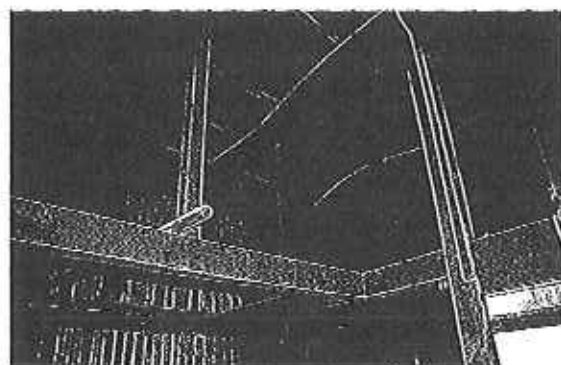
主屋上手の裏側にあるブツマ・オクナンドは、これよりやや新しい感もあるが、明治中期を下ることはないと思われる。長押を入れず、材や奥行の浅い床の間などに数寄屋の要素を感じさせる。

離れから南側は昭和18~19年に増築された。街道から奥まった場所に建ち、正面に門と塀を構える。離れは、表側に式台を置き、畳廊下を経て主人の居間と次の間を並べる。主人の居間は床の間と透棚と付書院を設け、素木を主体とした造りで時代相を良く示す。南側には洋間の書斎と応接室がある。洋間の床は寄木張とする。

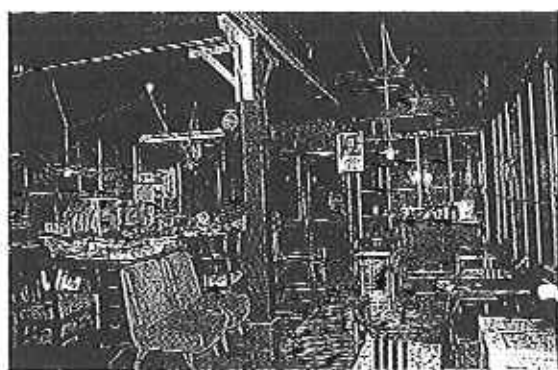
新奥には十畳と十二畳の二間続きの座敷がある。十二畳間は縁起床と床の間、透棚を正面に構える。素木を主体とした洗練された造りで、建具や欄間、襖の引き手など細部にまで上質な仕事がされている。

裏側には六畳台目と四畳間を並べる。六畳台目の部屋は長押を入れず、銘木を使用した凝った意匠をもつ。

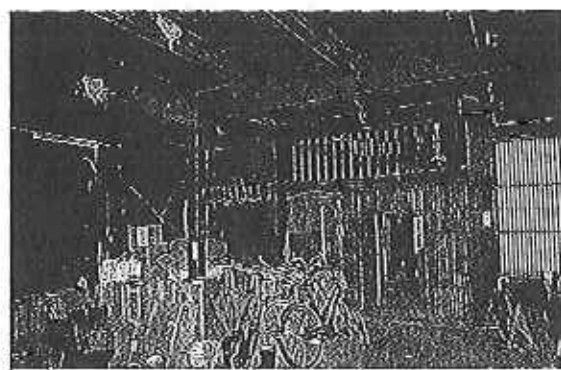
近藤家は、江戸末期の町家と昭和初期の座敷が一体となった上質な住宅建築で、近世から近代にかけての鉄山業の盛行を反映しており、歴史的にも高い価値を有する。敷地構えの保存状態もよく、さらに詳細な調査を行う必要があるだろう。今後の積極的な保存活用が望まれる。



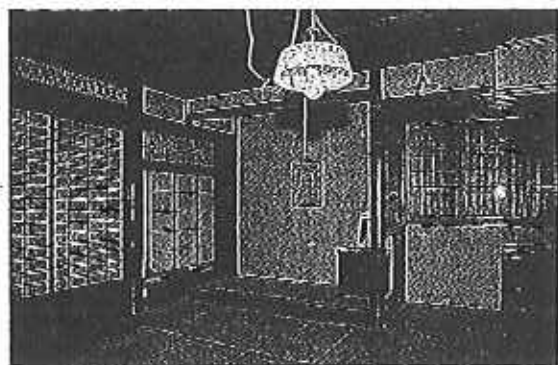
▲主屋土間梁組



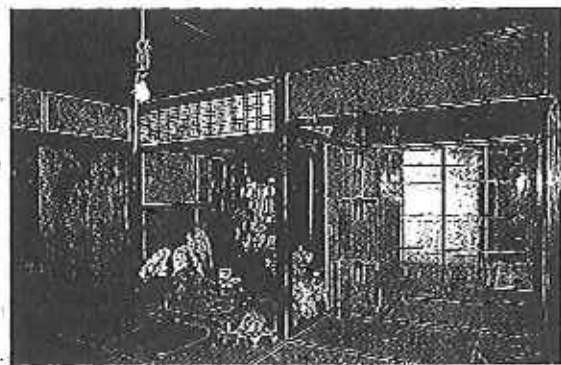
▲事務所



▲主屋土間

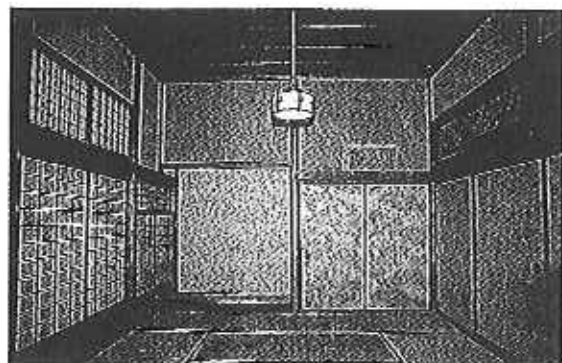


▲主屋座敷



▲ブツマ

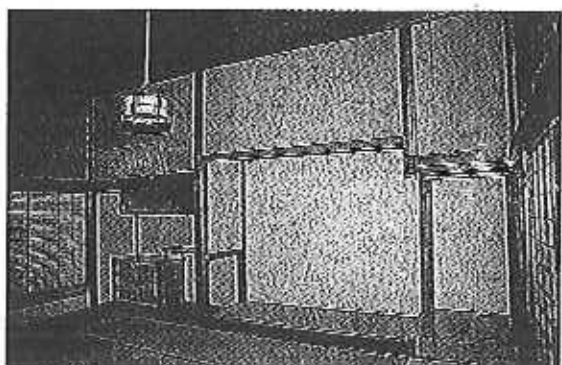
道路を介して近藤家の向かいに建つ日野町公舎は、旧出店近藤である。建ちの高い二階建てで、二階正面を海鼠壁と虫籠窓とする。内部は右手に土間を通し、左手に2列に部屋を並べる。上手中央に八畳の座敷を構え、床の間、連棚、付書院を配する。二階も1列に部屋を並べて座敷をつくる。無人のためやや傷みがみられるが、近藤家とあわせて今後の町並み活性化の核になるべき建物である。 (西田)



▲新奥座敷 (十畳)



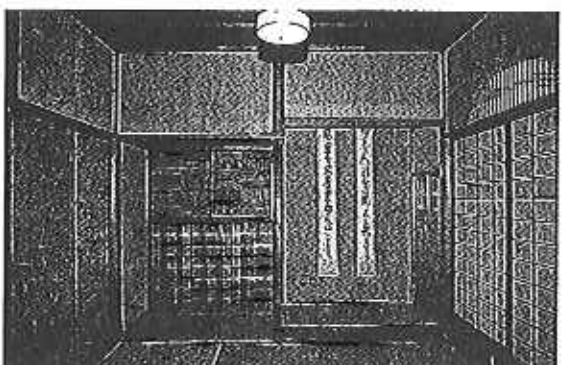
▲新奥外観



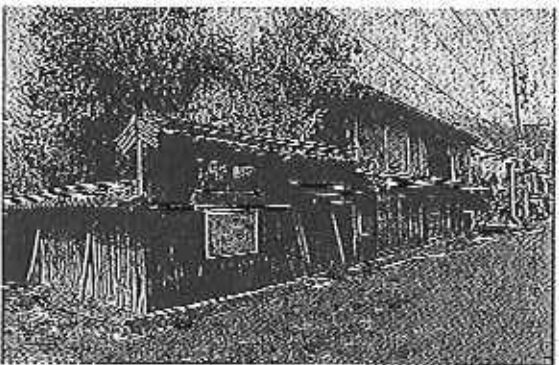
▲新奥座敷 (十二畳)



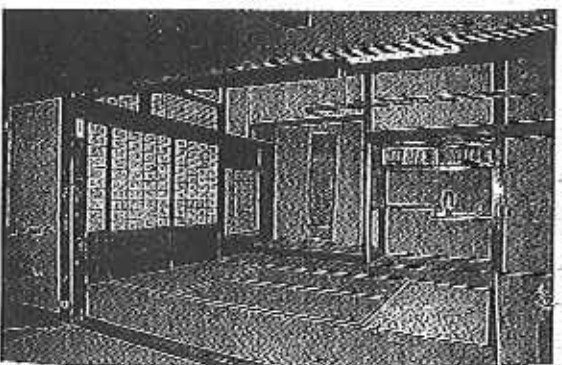
▲離れの洋間



▲新奥座敷 (六畳台目)



▲日野町公舎 (旧出店近藤) 外観



▲日野町公舎座敷

99. 根雨の町並み

根雨は鳥取県西南部に位置する日野町の中心地で、米子と大阪方面を結ぶ山陰街道と山陽方面に抜ける日野往来との分岐点の宿場町として発展した。また、「たたら」と呼ばれる山陰の鉄山稼業は鳥取県東南部および鳥取県西南部が中心地であり、輸入の増大で鉄価が暴落する大正時代にいたるまで、根雨宿も鉄山経営の基地として大いに賑わった。

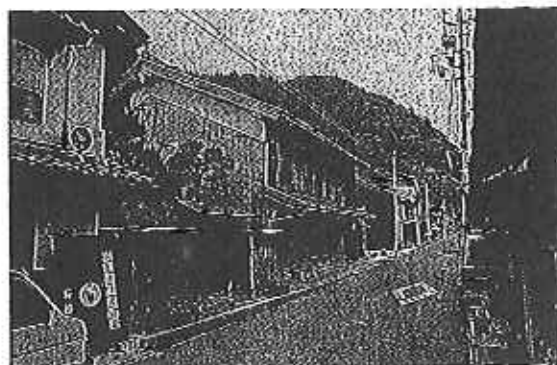
根雨宿の町並みは、北流する日野川の東岸を真直ぐ南北にのびる山陰街道沿い約600mにわたって切妻造平入の町家が軒を並べ、整然とした町並みを形成している。町並みの中程に日野川岸に建つ根雨神社の参道がT字に接続し、また町並みの北端では街道が東に屈曲し、伯備線の根雨駅に至る。

根雨宿に残る町家の建築年代は近代以降の町家が大半を占め、駅に近い北半には戦後に建て替えられたものも多い。また現存の地割からは、当初には街道筋のみの町割であったと判断でき、後に西側の日野川岸まで町場を拡大したことがわかる。

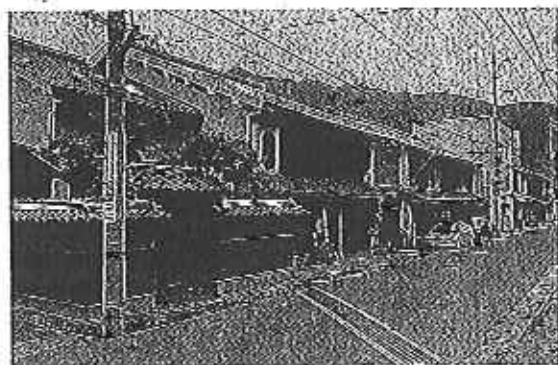
町並み南半の一角を占める近藤家は鉄山経営で財を成した商家で、最盛期には人口の3分の1の雇用を生み出したといわれるほど、地域に多大な影響を与えた名士である。近藤家の周辺には、近世末期から明治大正期の大規模町家が建ち並び、根雨宿の歴

史的景観の中核を成している。また町並みの中程に位置する根雨神社の社家、梅林家の緑豊かな敷地に移築された本陣の門（町指定文化財）が、かつて宿場町であった面影を今に伝えている。

また、梅林家北隣の旧山陰実業銀行は近藤家が設立した根雨銀行が昭和2年に合併したもので、公舎は昭和4年の建設。東の山麓に建つ旧根雨公会堂は近藤家が建設費の大半を寄付し、岡田孝男の設計で昭和15年に建てられた。根雨神社参道に架かる祇園橋は昭和8年の架橋で、近代的なT形三連続桁の橋脚上に、伝統的な造形の高欄・擬宝珠付親柱などをのせる。このような、町並みの内外に点在する昭和初期の近代建築が景観のアクセントとなっている。（参考文献：『鳥取県の近代化遺産』）（金井）



▲ 街道東側の町並み



▲ 街道西側の町並み



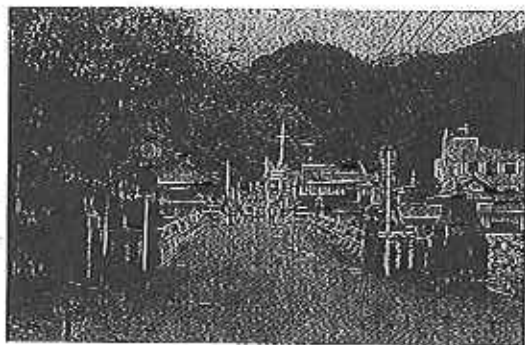
▲ 本陣の門



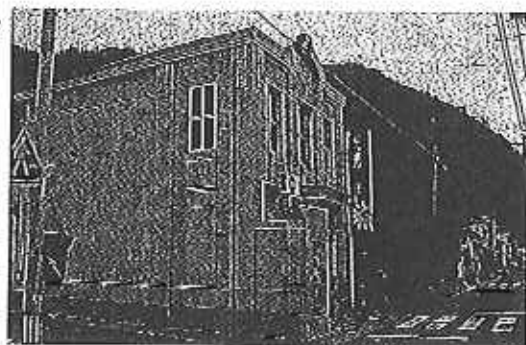
▲ 伝統的建造物の階高



▲ 伝統的建造物の階高



▲ 祇園橋



▲ 旧岩橋実業銀行

k-6 祇園橋

・日野町根雨/日野町

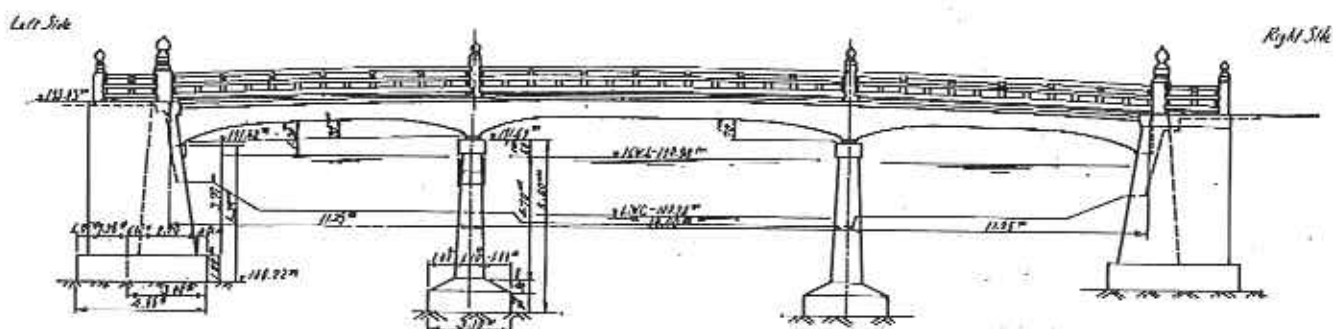
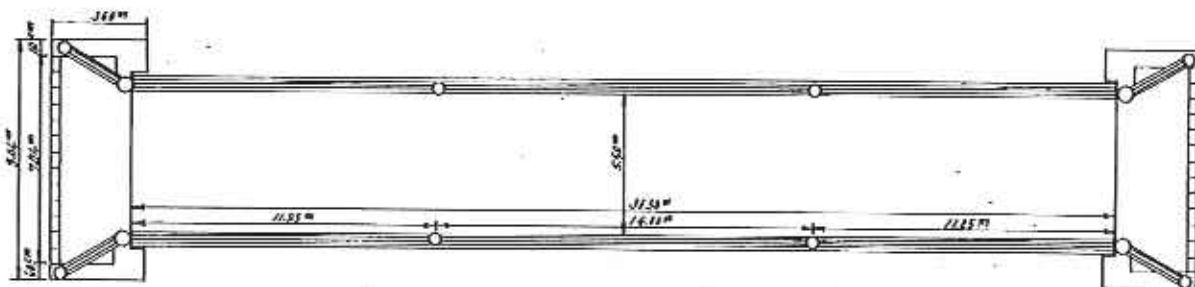
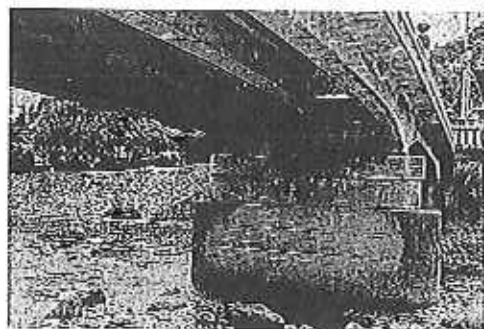
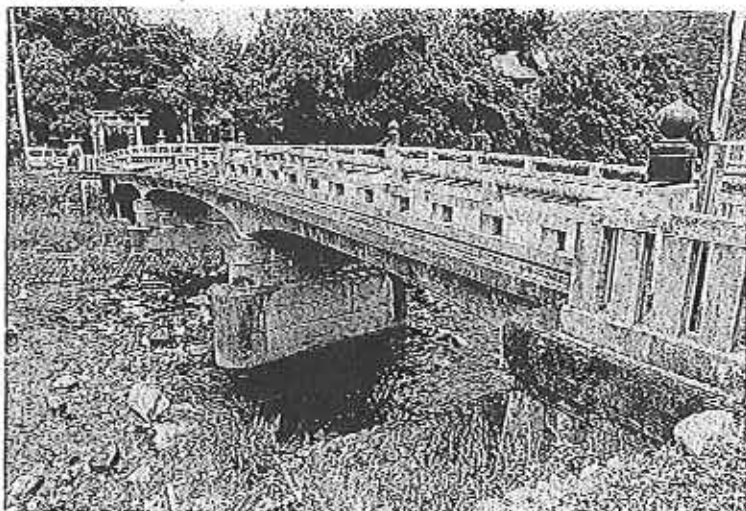
橋梁 鉄筋コンクリート造・3連・T形三連続桁橋
昭和8年(橋梁銘板)

根雨神社と出雲街道をつなぎ、板井原川をこえる鉄筋コンクリート造の橋梁で、神社の参道でもある。「府県道根雨新見線祇園橋橋梁改築工事設計書」によると、橋渡長36.5m、有効幅員5.5mで、この部分の面積が201.19㎡である。橋体は鉄筋コンクリートのT形桁を3基連続させ、路面はグラノリシック舗装、高欄を洗出モルタル仕上げとする。高欄には

和風の唐金擬宝珠を取りつけている。また、橋の両端にはマス形にひろがる橋袂を設け、花崗岩の石灯籠を四隅にたてる。鉄筋コンクリートの橋梁ではあるが、路面より上の高欄・擬宝珠付親柱・石灯籠の造作は木造橋そのものであり、近代的なT形三連続桁との対照性がおもしろい。全体としてみると保存状況は良好だが、高欄を中心にモルタルの剥落がめだつ。根雨神社の鳥居、板井原川の清流や石積み護岸、周辺の山々の景観とよく調和しており、祇園橋を中心とした環境全体の保全を考える必要があるだろう。(浅川)

(写真)
(左) 全景
(右) 橋脚

(図面) 縮尺1/300
設計図をリライト
(上) 平面図
(下) 立面図



本館

木造・2階建・洋小屋・切妻造・棧瓦葺
昭和15年



坂の下から見上げる

旧根雨公会堂は根雨の宿場町の東、根雨神社と相対する山の中腹、もと八幡神社の社地にたつ。建物は木造2階建、切妻造で妻壁を西側の正面に向ける。昭和14年3月10日に着工し、翌15年3月15日に完成した。鉄山経営で財をなした根雨の資産家である近藤家7代目当主の寿一郎が建設費用の大部分を寄付している。近藤寿一郎は事業家であるとともに、郷土の教育文化の振興にも貢献し、日野郡や鳥取県の教育会長を歴任した。

根雨公会堂は、戦前の多くの公民館と同じく、映画・演劇・講演など各種の催し物会場として用いられた地域における文化の発信地であった。しかし、他の公共施設の充実にもない利用が減少、補修工事を経て昭和61年からは日野町歴史民俗資料館として用いられている。屋根瓦は平成7年に取り替えられたもので、かつては石州赤瓦を葺いていた。内外装とも当初の状況を比較的良好に残しており、正面妻壁には根雨のネと文を重ねたシンボルマークが今も飾られる。

外観の旧状は、赤色の棧瓦屋根・大壁造り

モルタル粗面仕上げの外壁・ポツ窓の組合せである。今日の住宅建築に広くみられるデザインだが、じつは大正末期から戦前にかけて関西の住宅建築で多用されたものである。武田五一が和洋折衷の住宅のファサードに最適とした、和風にスパニッシュをとり入れた様式である。武田自身は「新日本式」、柳橋諒は「新折衷風」と称した。1階側面にみられる鉄製円柱を立てたコロネード状のデザインにもスパニッシュの影響をうかがえる。

設計者は三越大阪支店住宅建築部の岡田孝男〔1898～1993〕。京都帝国大学建築学科教授をつとめた武田五一の愛弟子である。岡田は武田の命により昭和5年に三越大阪支店に入社、三越に住宅建築部が発足した。当時の三越大阪支店住宅建築部は、スパニッシュや「新日本式」の住宅を手がけており、根雨公民館のデザインは武田の指導を受けていた岡田が手慣れたものである。一方で、周辺民家との調和を考えて質素に、という寄贈者・近藤寿一郎の希望があり、近藤家出店をはじめ根雨の町にみられる漆喰壁の町家に通じるデザインともいえる。

2本の円柱のたつ玄関ポーチを入ると、左右にかつての礼売場と下足室がある。現在、礼売場は管理室となっている。また、展示室となっている客席は平土間、2階は3方にギャラリーをめぐらし、舞台の反対側はスタンド状にして中央に映写室（現在は収蔵庫）を設ける。客席の梁間7間を支える小屋根組は三角ハウトラスに挟み梁を併用したもので、振止めや水平筋流、火打梁、方杖を入れて固めている。

全景



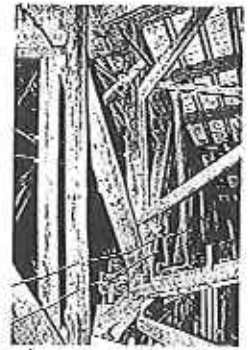
「鳥取県の近代化遺産」(鳥取県教育委員会、1998年)より

諸室の内装は木床・漆喰壁を基本とし天井は卒緑天井もしくは漆喰塗、客席は吸音ボード張りで目地棒を入れる。きわめて簡素な仕上げである。舞台正面にプロセニウムアーチをまわすこともない。玄関ポーチのモザイクタイル張りの円柱と、その正面につくデザインを凝らしたブラケット照明が外観のポイントとなっている。

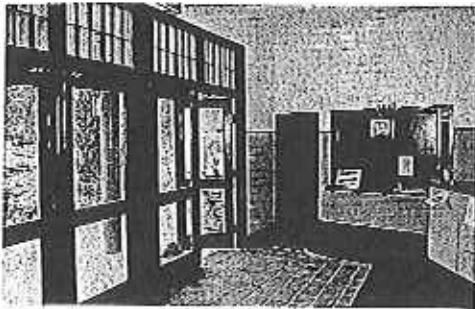
現在、館内にはさまざまな民俗資料が展示されているが、やはり空間との調性は否めない。舞台は広くはなく天井も高くないが、袖

舞台や脇舞台もあり舞台背後には上手と下手を繋ぐ通路も確保されている。客席も平土間ではあるがスケールのヒューマンなものとなっている。デザインに派手さはないが劇場としての価値は今も高い。現在各地では、地域の芸術家に施設を開放したり、地域定着型の演劇集団を招聘するなどさまざまな取り組みが試みられている。新たな演劇活動の発信地として再生をはかる方法も検討に値しよう。

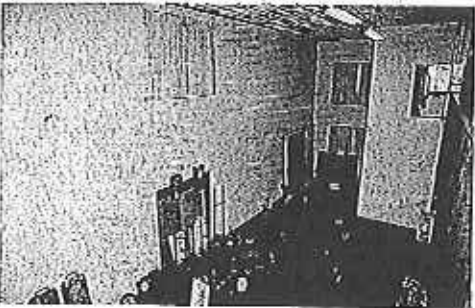
(溝口)



小屋組



(左) エントランス
(右) ギャラリーからホールを見る



(左) 舞台
(右) 2階正面側の展示室

〈図面〉 縮尺1/400

(上左) 1階平面図

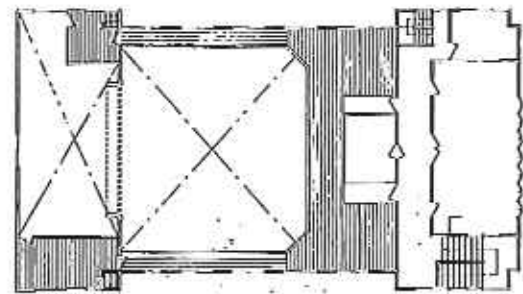
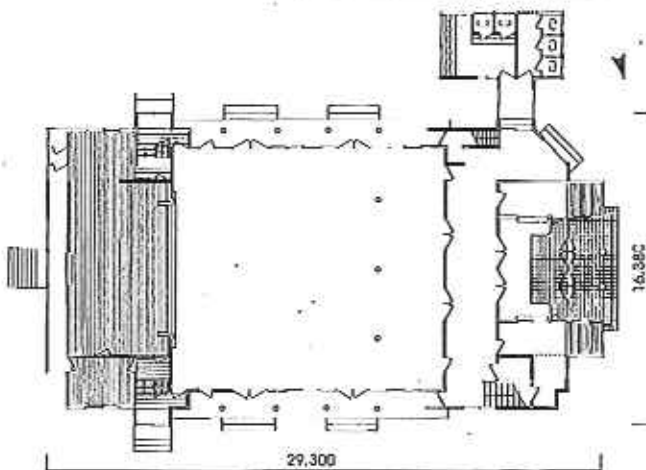
(上右) 2階平面図

(下左) 側面図

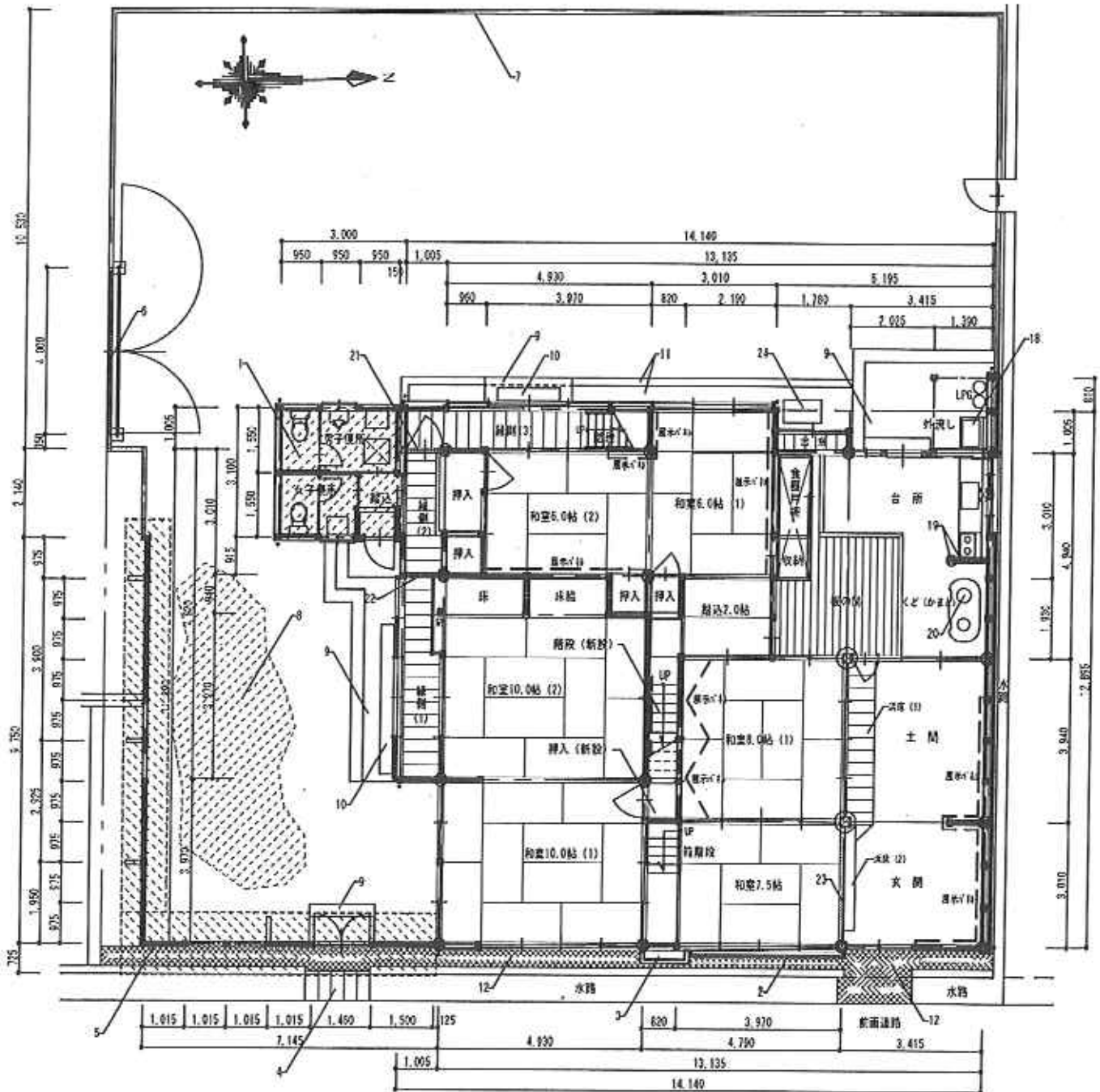
(下中) 正面図

(下右) 小屋組

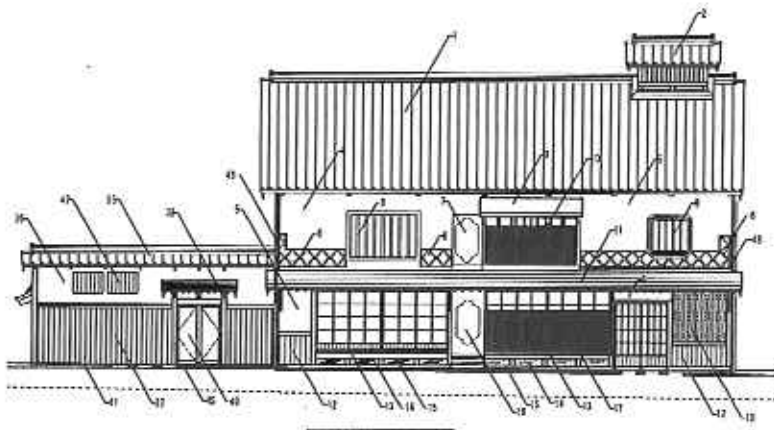
小屋組を除いて改修用図面をリライト



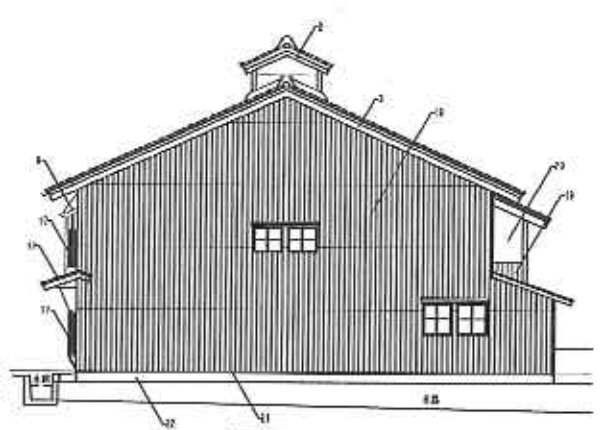
日野町公舎 (旧出店近藤)



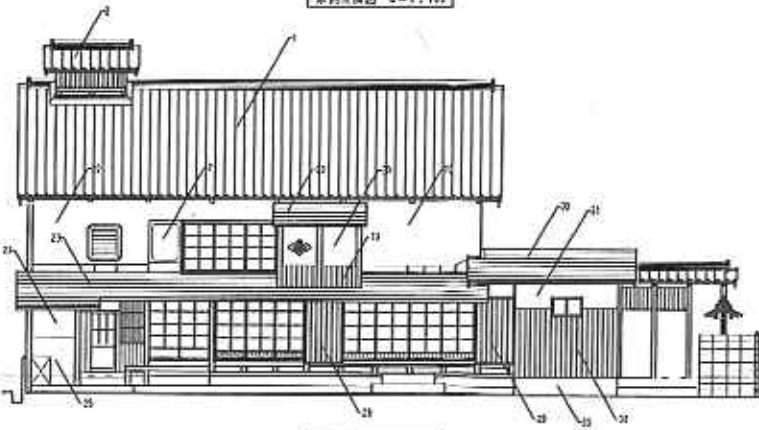
(改修) 1階平面図 S=1:100



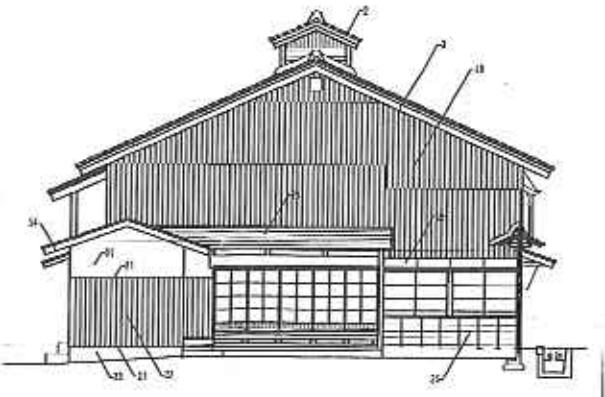
東側立面圖 S=1:100



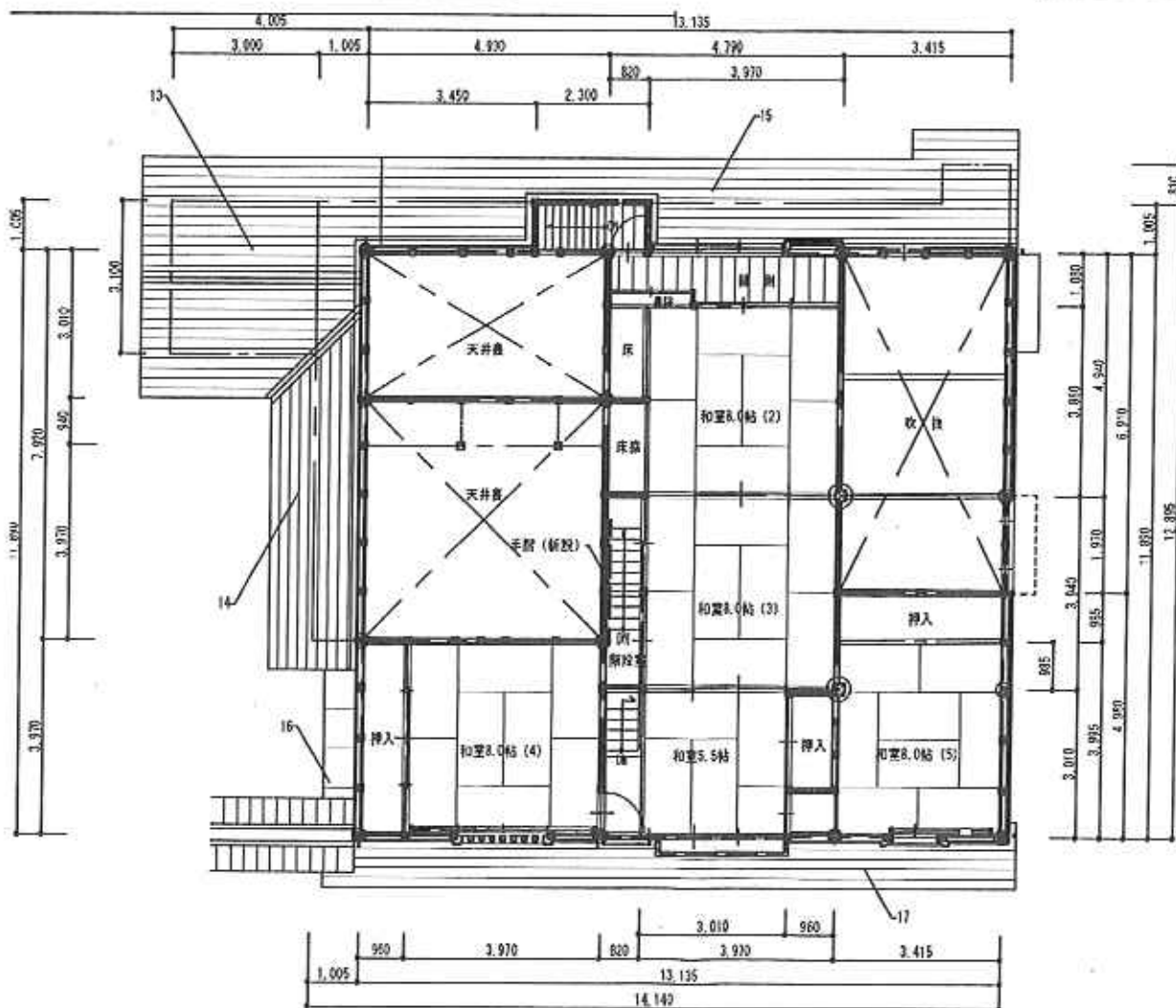
北側立面圖 S=1:100



西側立面圖 S=1:100



南側立面圖 S=1:100



(改修) 2階平面圖 S=1:100

f-3 旧雲陽実業銀行根雨支店

・日野町根雨466/山陰合同銀行

本館

鉄筋コンクリート造・平屋建・奇椽造・瓦棒鉄板葺
昭和4年(日野町勢要覧)

根雨銀行は出雲街道の要衝、たたら製鉄で栄える根雨宿に明治30年8月に設立され、同年10月に開業した。その後、昭和2年に雲陽実業銀行と合併、昭和6年7月に松江銀行根雨支店、昭和16年7月からは山陰合同銀行根雨支店と変遷をとげ、現在に至る。本館は昭和4年、雲陽実業銀行時代に建てられた。根雨宿の街道沿いに西面し、サービス部門のある正面の鉄筋コンクリート造部分と、背面の木造平屋部分、最奥の土蔵からなる。

鉄筋コンクリート部分の内部は、昭和54年と平成6年に比較的大きな改修があった。とくに、当初は全体吹き抜けだったが、改修によって低い天井をはったため、広びろとした内部空間が失われたのが残念である。しかし、天井裏にはほぼ当初の姿を残している。

正面ファサードは、当初の意匠をよくとどめている。コンクリート製の柱形によって正面を三分割し、中央上部にはペディメントをつけ、草の葉をかたどった文様で飾り、全体をシンメトリーな構成にしている。柱形の間には窓を配し、壁面をタイル張りとする。コーニス(蛇腹)、デンティル(歯飾り)、中央柱のフルート(条溝)など、様式建築の装飾を多用する。なお、建具は現在全てサッシに

かえられている。

南側面も正面同様の意匠とするが、現在の通用口は当初のものではない。一方、側面は、近年、隣の民家が撤去されたため、その民家屋根形痕跡が残る。

旧雲陽実業銀行根雨支店は、戦前まで根雨宿唯一の銀行であって、内部は改造が大きいものの、ファサードは当初の姿をよく残す。昭和4年の完成当時は、伝統的な町並みに大きなインパクトを与えたことだろう。現在、キャッシュボックス、ポスターケース、看板などによって、せっかくの正面ファサードが混乱しつつあるのは惜しまれる。(箱崎)



正面ペディメント

(図面)
(上) 断面図
縮尺1/150
(下) 1階平面図
縮尺1/200

(写真)
(上) 全景
(下) 現在の天井裏

